

S子の語い数の増加をめざして  
—主に 日常のふれ合いを通して—

吉田裕子

1. テーマ設定の理由

自分の思ったこと、感じたこと、他への要求や欲求を、言葉に出して言うことにより、我々は満足感を得ることが多いのではなかろうか。自分の言いたい事が、言葉に出ない時のもどかしさ、はがゆさは、何ともいえない。

S子は、ダウン症で、言語障害のある児童である。発語が少なく、自分の言いたい言葉が出ないため、話の返答が常に、「ほか」「おちんちん」「おっばい」の連発である。また、うまく自分の意志が通じない為に、押したり、たたいたり、ひっぱったりというような乱暴な行動に出ることが多い。

そこで、日々の生活の様々な経験の中で、S子が感銘を受けたり、印象に残ったであろうと思われるものを軸とし、できるだけたくさんの経験を入れて、言葉の素地を作ってやりたい。また、少しでも語い数を増加させ、少しでも自分の気持ちを、他へ伝えるようにさせたいと考える。

2. 取り組みの重点項目

S子の実態から、生き生きと自ら積極的に取り組んで、しかも語い数が増えるであろうと思われる項目を次のように設定した。

(1) ままごと遊びを通して、言葉の意味を獲得するように働きかけをする。

(2) 多人数の前での自己発表として、朝の日記発表をさせ、みんなに話を聞いてもらう機会を増やすように心がける。

(3) 絵を描くことを媒介とし、少しでも自分の思ったことや気持ちを言葉で表現できるようにする。

3. 取り組みの実践と経過

(1) ままごと遊びを通して

・4・5・6月⇒生活単元学習が炊飯遠足で、カレーづくりを主にしてきた。S子もカレーづくりは、大好きで、ままごとをし

ていても「カレー」「たまねぎ」「にーく」と、これまで学習で使った材料の名前を、とんとん話し、これらを「トントントン」といいながら、切る仕事をするようになった。プレイルームのすみに行って、ままごとを並べては、これを繰り返していた。カレーづくり以外の材料の名前をこちらが言っても、全く聞き入れず常に「カレー」「にーく」「たまねぎ」「とんとん」と言う。

・7月⇒プールに入るようになり、ままごとをしていても「プーウ」「プーウ」としきりに話す。しかし、ままごとを並べて話すのは、やはりカレーづくりのものであった。

・9・10・11・12月⇒9月になると、友達と一緒にままごとをする機会が増え、友達との会話の中から自分のものとなった「どーど」を話した。これは、S子の前に誰かが座ると、まず言う言葉となった。しかし、ままごとの中で使うのは、やはりカレーづくりのものであった。

ままごとの内容を、できるだけ学習内容、学校行事にかかわるものにもっていったが、S子は、自分が気に入ったパターンは、他がかなり係りを持って変えさせようとしても、容易に崩さない。いつまでも同じ言葉の繰り返しではあるが、言葉を覚えるのは速くなっているように感じられる。

## (2)朝の日記発表を通して

昨年度からの取り組みで、「わたしはー、しました。」と4月初から、はきりした口調で話していた。朝の会の後は、必ず日記発表があるというのを覚えており、教師が、「次は、日記発表です。」と言い終わらないうちから、生活ノートを取って「はい」と手渡したりする。5月までは、「わたしはー、しました。」で何をしたか話さなかったが、6月に入って、「わたしはー、ふおにはいりました。」と突然話した。それを聞いたクラスの友達や教師にほめられると、得意顔で何回も話した。それ以後は、ずっと「ふおにはいりました。」が続いている。11月上旬に「オルガンをしました。」と一度話したが、また「ふお」になった。

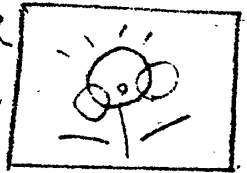
オルガンを話した背景には、ピアノの練習があったようで、家でお母さんと練習したのが、きっかけだったようであった。こ

の時点で、もう少し話を引き出していけば、他にも話が広がる可能性があったように感じた。現在は、かるたが好きで、いつも家でしている為「かうたをしました。」とよく言う。誰としたのか問われ、「おいちゃん<sup>(る)</sup>」と答えたことがあり、それから、「かうたを<sup>(い)</sup>しました。」「おいちゃん」とほとんど続けて言っている。

### (3) 絵を媒介として

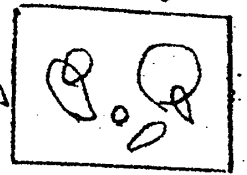
絵(1)

1学期当初から、S子が描くのは、絵(1)のような人間の絵ばかりで、黙って20秒程で描きあげると「おしまい。」と言って、クレヨンをしまっ<sup>(る)</sup>てしまっていた。この絵のパターンが教え込まれ、描かされているものだった為、これを崩し、好きなように、話をしながら絵を描かせた方が良いというアドバイスのもと、S子の思うように絵を描かせて、話をさせていった。



### ・11月まで(学習発表会以前)

絵(2)のように、丸・長丸を描いては「バナナ」「かき」「いも」と言う。最初は、丸など描いて、こちらが「これは何?」と問わないと言わなかったものが、9月の終り頃から、自分で描くものと言いながらかくようになった。ここでは、芋掘りをしたイモであったり、家で食べる好きなものを話した。この時、十分聞いてやると、良い反応が得られる。



### ・11月(学習発表後)

学習発表会で「おおきなだいこん」の劇をした。S子は、カラスとねこの役をし、この時の台詞「そうだ、コッコー。」「うんとこしよ、どっ、こいしよ。」は、線を描きながら歌を口ずさむような感じで話し始めた。線は11月以前と一緒にあるが、大きな丸を描いては「おおきな、おおきな。」と劇を説明するように言いたした。12月に入っても、このパターンが定着してしまうと、それ以上の変化は見られなくなってきた。

### ・12月(クリスマス発表会を契機に)

これまでの学校行事の中で、一番S子が楽しみにしていたのがクリスマスであった。絵も言葉もパターン化してしまったので、画用紙に描かせるのではなく、具体物を見せ、その名前など言わ

せてから、絵という抽象的なものへと進め、どのくらい話したりもの名前が言えるかみた。特に興味のあるたツリーのかがりもとりあげた。S子は、次のように言っていた。

	本物のかがり	ツリーの茶会
いえ	おーし(おうち)	おーし
くつ	くつ	おーし→くつ 違いを指摘すると、 正しく言えた。
ほし	キラキラ→ほし キラキラすものは 何というかと正しく言う	ほーし
すす	すーず	ろーん(身振り付き)
ろろく	ろー	ろー
ロース	ロース	ロース
ケーキ	ケーキ	ケーキ
どーぞ	どーぞ (身振り付き)	どー (身振り付き)

このように、具体的なもので、自分の興味のあるものは、はっきり名前を言う。また、はっきり言えないものは、いかにして相手にわかってもらえるの身振りも入れて一生懸命表現しようとしていた。具体的なものを見てからだと、抽象的な絵に変えても、具体物と同じように言える。これまで何年間もツリーをかがり、どんなものがかがりにはあるか経験している為、このようにすんなり、しかも、目を輝かせて取り

り組んでいたように感じられた。

#### 4. まとめと考察

S子の場合、自分のものとして獲得したものは、一つのパターンとなって常にそれを繰り返して言いがちであった。これはままごとや[3(1)]や、日記発表[3(2)]からよくわかる。しかしこのパターン化した言語に、日常生活での変化(ままごとでは、友だちの参加・日記では、ほめられたこと・絵では、新しい学校行事)があった時には、新しい面が端々に現われていたように感じられた。この新しい面を探し出す為には、日記発表でオルガンをしましたと言ったのか、お母さんと練習したからだったように、子供の生活実態をよく知っておく必要があると考えた。特に、はじめての言葉は、十分その言葉の持っている意味・内容がわかってこそ、話すことを喜ぶようになる。そこで、なるべくS子にもこのような事を経験させ、喜んで話すようにしたいと思う。

今後の問題としては、S子は、口蓋が普通より高いので、意欲面のみからではなく、発音・発語訓練も必要ではないかと、思われる。